里見八犬傳 第九輯 巻二十

特
イ曽イ
600
262

600
262

南總里見八犬傳第九輯 巻之二十

東都 曲亭主人編次

第百三十回 犬士露宿して追隊を迎ふ 老僧袱を褰て寘罰を示す

却説犬塚信乃戍孝は、嚮ふ憶ぢ憩ひ、路傍矮堂にあり。地藏菩薩の奇異、利益齎らす米の来歴を、照文並ぶ、大代四郎親兵衛の漏さとく、四六城の舊僕出来、公ぶ横死事及徳用を虜ふ。その事の終りまで言詳ふ盡さ程ふ照文が若黨紀二六も、庫裏の邊ふ在りしが、一五一十を洩さず。俱ふ感嘆あるけり。當下信乃は紀二六ふ吩咐て、嚮ふ殿兵某甲ふ預ける米を、裏の伏倉ふ寄せて、件の人々ふ、せしが、皆奇ふ驚ぢ妙と稱えく、佛法无量廣大の利益を仰ぎ、ふるけり。開ぎ中ふ、大法師は恭ふく身を起して、左右ふ、方ふ、うち向ひ合掌して地藏菩薩を伏拜むこと數回、念一果て坐ふ復りて、却信乃ふ告ふ、拙僧

素より菲薄ゆて念佛の外所作なけれども君侯御父子の御盛德と和殿達八犬士の孝義賢才ゆ因縁あれば世人今境遇ゆ及ぶのみ非情の石像灵異あり今日の大厄を救ゆ玉ひ利益眼前疑ひなし又風雲の天助の如くに伏姫神の擁護なくば狗神の冥助い列ゆ佛の利益い促迫なるぞ是神佛の異なる所以賞罰その差あゆ似るも悪を懲して善ゆ與る天理の外いあるべくば寔ゆ幸なるぞと感嘆ゆ他事なくして信乃いはゆる餘の七犬士も我们なるべ然らんやとそ俱ゆ謙遜なりける姑且て信乃い毛野ゆ命ぜて信米ち才ゆ二舛ゆまるゆ少ゆ我一路兒い庵主姥雪崎主僕殿兵と俱ゆ二十名是ゆ我们八名を加れば都て二十八名の食料なれば粥ゆ炊ぎ一碗を各啜ゆ足ざるべ那白屋ゆ鍋い無ちと問へば毛野頭と掉て不吾那里ゆ養子ゆ布る敗筵一枚あるのみ鍋釜などあるぞと答を道節ち吹て曰くゆ和殿们も知るべく其米と嚢の侭ゆ水ゆ浸し壤ゆ埋めて上ゆ柴と焼とい蒸れて軈て飯ゆ做るべ。なる野陣ゆ鍋なる折戰飯を炊く者の必ずなる事なれども人のヨメ

文溪堂藏

沁ゆ米寡沁い粥ち外ゆせざるべ。とへば莊ゆ點頭て現ちの米ゆ足ざれば一握宛とても一實の餓と凌ぐもせん。ゆも塩なくて不便ゆ。とへを毛野いえるて否塩い有り塩い有り咱们方僅這庫裏の背なる白屋の邊と撿ゆ折其頭ゆ在る石地藏ゆ人の供なる塩三土器あり又その前面なる大竹藪ゆヨメく筍兒の生なるとえ沁筍兒い自生の侭ゆ拔ぎ〻く梢を伐棄然而竹の枝をりく根まぞよく節を串沁て上ち脩酉油を沃ぎ入れその四下の土と空て何まれ新ゆく焼とえいその筍兒蒸熟して味ひ烹なるゆ勝れども如此まればその明年其頭ゆ筍兒出るとなる〻寔ゆ好事の驕饌なれば其ゆ倣んとゆ思へれども藪なる筍兒と穿採ぎて。開も壤蒸ゆ做さるべ飯の足ざると補ふべ合米ゆ妙なるぞとゆ大家紘び毛野ゆ萬事ゆ脱落なく恁なる折ゆもえるとの逸早ち〻と答まけ。恁而信乃い紀二六ゆ恁々とろゆ沁させて件の米と遽與んとまるゆ嚢い原是石地藏の頭巾なれば二舛の米と容ちとも二舛の飯い蒸く〻何を欲得とそ求るゆ、大の頭陀嚢の白布單ゆ製れるあり是よりゆ茂と啓沁て出ぎとれぞ現四五

丼の飯を容るべし。登時信乃い又紀二六ホ正ゆ米甲乙両箇は嚢ホ分ち納て水ホ浸し。そゞ
ぐ沙く土中ホ埋て柴と焼ぐ飯ホ做るべし。又郷島ホ汝もとらん竹叢ホ生出る筍児を
ヨヌく抜採て皮を剥祛ぎて。梢を伐棄根まぐ節を串ホて石地蔵ホ供る。塩を佛ホ乞
禀て筍児の節の内へ塩を班るく好搗入ホて壌蒸ホしく皮を剥ねと教諭ス照文
も詞を添く。後ハ紀二六その美ホ要る紀奴隷毎ホ偽せて毒ホ苦せよ面ねくこそ世ホ紀二六ハ
ゆそ日の最長ハ最中ゑれが朝のゆと忘るゑ紀の時ゆまでもまぐ暮果ねと八犬士ハ那邯鄲ゆ客
舎ホ憩ひ盧生ホあるぐれが件の飯の蒸るまぐ。假寐の枕を求ぎ大家親兵衛を珍客ゆ
、大照文代四郎も倶ホ草裀ホ囲坐しく。閑談数刻ホ及びる。當下小文吾ハ親兵衛ホうち高
ひて。南仁。沒が富山ホ出世して。老侯ホ見参の始より素藤を征伐の支の趣又ハ日両
国河原ゆく。蜑崎生ホ相別れて素藤を再征の為水行を上總の舘山へ赴ぐ折のゆまでハ

蜑崎生ゆ蛟雪ゆ。對面の折ホ听ホかど小後のゆハひまぐ知ぎ那折上總へ伴ひ。と考えるる。
那三個の一路兒と。そゞそその地ホ倶しく来ざると向べ又荘人もゆつる隨ホ親兵衛と次囲太
鄭立孝嗣の奇耦を只顧感しく已ぎ又毛野と道即ハ孝嗣が舘山ホて軍功の有や無
や那身の安危。そゞホと問ぐ。信乃現八角も又、大照文代四郎も齊一膝を找めゝ。ホく。
と問れる。親兵衛憶ぎ歎息して。肇て茲ホ鮮示も素藤伏誅の支の光景及妙椿を
富山ゆ牝狸ゆそ。孝嗣並ホ次囲太鄭ニも。戰功ハ。ゆ。
仕ゆ。ん。と欲せぎ又親兵衛ホ従て。結城へ来ゆる路の程。今日諸川の這方ゆ。親兵衛ハ
憶ゆる。一個の法師ホ喚留られて、大庵主の尼難と。詳ホ告られしゆ。ゆく路次ハそぞ。
左右川の上ゆ。緝捕の頭人長城惴利の馬の尻ゆ撻走しく。人馬を急湍ホ滾ゆ落し。
敵の駆兵と拗ぎて、大代四郎照文主僕の急難を救ホ折後れて来ゆる孝嗣次囲太鄭
三ゆ共侶ホ那里の圮橋と渡る程前面の藪蔭ホ敵の伏兵あり。放ゆ鐵砲ホ件の二人ハ斃ゆ

落されて急湍の為に流れ亡け骸も住めぞ做りけかど天助風塵の奇特によりて敵或は同士殺るゝ或は川に顛陷く、大代四郎照文主僕を拯ひよと告知らく又は毒の那折風霊狸の天助とかりの。必是伏姫神の霊験擁護るゝに里見に舊縁をけれいとく狡忠孝義侠ヨヲく泳ぐに我三個の一路児と看詠はあるけれど鄙語にいふとあり藥死ざる病人を治し神に高運の九夫と衛る然ば孝嗣次圓太郎三ぶ果敢く川に殺る陷さ俱に命數盡るるゝむ左も右もと惜けれ示娯ゝ具に解示せ、大照文代四郎も那折のるとひ出て人各幸不幸の同じらぬと歎けり今これを听く毛野道に即莊次小文吾信乃現八大角も皆胸を浅して孰り浩歎せざるに惜むにあまる孝嗣次圓太郎三ぶ一期の為命先縁虚しかるまじて偶この地に来けるに再會の本意画餅に做りて造化の小児共笑策るまじとにいざるとにいざるべし果せるかること皆共侶に送恨る方をけりそぶ中に道節憶ば聲を励して今番孝嗣ぶ三友の横死に悔て復ゝ歎にれども犬江ぶ那折に冤家の頭

人長城惴利とやらんと討捕ふ慰るとにぶあるに犬江ぶその馬を捷走らせ川に没るのを見ば開亦仁の過るに當の敵あるまじとも皆同悪の奴ぶれ生口毎の首殺る隠して這憤怒を洩さぬ何をもて孝嗣ぶ三個の亡魂を祭んやと性起るを毛野に推禁めるを見て易事ゑれども今はらんと思惟るに那風霊狸の天助妙応又犬江に中途ゆ、大庵王の急難を忠告あるとに法師のあ又石地蔵の奇異利益都て躬方に福あり甲も乙も總括めて伏姫神の神所行ゑん開を何ぞと推てもえに神灵に是形貌ゑを物に託るとに形貌あり亦ら那忠告の路上法師も亦路傍矮堂ゑる石地蔵も皆是我姫神の神所為にあるべらむ恁る妙応あるゝ里見の家臣ゑるとて忠孝の後生義侠の老人を殺に做りゆんや那命數の竭るゝと竭ざるとに誰ら知るゑに非如那三個の知音ぶ敵の鐵砲に殺られるとも躬所に死ぬべし又急流に陷るとも水戯に熟て好泅ぶ命を免るとあんに殺ゑ屍骸を換せざりて惴利ゑに同悪の生口毎を殺さんゑに短慮にそと諫れに壮次小文

吾もその説を好しと。現大阪の意見のごく。結城の城より追隊の士卒ら今ゆもあれ索ねあい安宗
内ふ惴利も俱せられん縱惴利いあるもあれ真の追隊がうち向ひ自他の邪正を解諦あく惴
利を乞て怨を雪ん言聽れぎらその折ふ生口毎の首擊落し追隊を破らく安房へまかり
ん并い已とを沼ざる美えとへ大角も亦ふ遠く唐山の礼を按まるふ君父の讐ゆ與共ふ
天を戴るぎ兄弟の讐ゆ兵を復さぎ朋友の讐ゆ邦を同うせじというるも亦時宜ふ依るべ死
のこと諭せば、大も亦ふ約莫這回の念佛供養い先君並ふ列將士卒の追薦の為る
るふ精舍い阿脩羅の街衢ふ変りく殆危窮ふ壁びいども躬方三所の鬪戰ふ一個も
敵を殺さぎしく他们ら同士殺るあるのこ恁てぞ拙僧本来の志願ふ稱ふと欲ひ思るふ今一
朝の怨ふよりて殺伐の義を行れるべその理ゆるも慨しけれの義を美容ゆひねと陪話をび親
兵衛信乃現八照文も代四郎も、大の意衷を思ひ返て俱ふ詞を盤を程ふ道即遂ふ思ひ
かへしてうち微笑へく答るゆ各意見を盤さるい現我為ふ良策へ那孝嗣い咱们ら天阪大

江の知音又次圓太い犬田犬川と舊交右淺くびあるふ這二三子の意見とるさで我
一個殺伐の義を上旨とあるい備若を人ふ似れども非理暴戾るる仇の為ふ益友三名と亡
れる。憤の甚方るさふ漫るけ劇談を傷痛く思れけ。ようるとうち解てるふ又餘談ふ
及ぶ程ふ紀二六を蒸る飯と筍児と菅笠ふ載せ奴隷ふ持て來て犬士と照文ふ報るゆ
仰ふ儘しと来と筍児を壌蒸ふ仕りひしふ是腐せ米い奇くも一倍殖て両ふ固の嚢ふ
満いひぬ恁てい上下二十八人の夕饌ふ餘りあるべ。めさるべうのそとさ。ぜもと大家ろ奇ふ驚
ぬく。是も亦伏姫神の冥助るる狹とぞろふ敢亦ヨヲ辯せぎ飯い各腰ふ吊る水飲の椀あれば
出してるるふ壯衣ひけるぞ筍児い蒸ぬ。後ふ皮と去て切るゆ紀二六ら准備あける。楢の廣葉ふ
うち載く人別ふ薦めけり登時信乃い古歌と思ひ出く家るべ筍ふ盛るものと草枕どうち
誦れば大角躯て下と續て旅ふ。あれば椎の葉ふ。といひけり恁だりのゆも折ふ觸てぞ。ぶ
與るふ。あるべ。然び世の常言ふいるどく。飢る折い東西皆美味ゆ各腹ふ充満あるべ

その餘の夥兵伴當們はそ紀二六は遞與もそ他們も都て漏る者なく飽もぞふさべ。猶翌の早餉は做もぞ餘飯あらとふ疏食を啖い水を飲む肱を枕として今宵をあは明しゆるも亦是君子なるべしとふ毛野が秀句は奥あれば大家笑扃は入るふけり左右もる程は日の暮しかば照文ら八犬士と商量あり夥兵と紀二六們は課く渉庭は篝火を焼もるは半分朽たる散木と老樹の枯枝ヨりれば通宵薪は医しらぞ八犬士照文們は結城より蒐る廢兵追隊と為ら曉は這里は憩ひと人知ざる狹小夜深るもぞ外面は推寄来る敵ら防げれば背を合し膝を抱紀く一霎時疲労を補ふ程は夏の夜いとぞ短くて那方は鳴てもくらん杜鵑横雲の隙は聲のみあそ鴉い茂林を離れても城より追隊いらまぐ蒐らぞ昨夕残れる飯あれば又筍児を壞蒸して大家早飯を果ら犬士們ら不娯しさは城へ使を遣しと那里の答を听くべ狹然ぞ間諜児をとそ城の動静を探ん狹とそ商議は時を移しらば已の左側はるふけり浩処は這廢院の三門を只管は敲く者あり紀二六もく聲をうけて来るは誰やと問ふ當下敲く者答ていはう是い

結城殿同宗の老黨ぞ小山大夫次郎朝重と喚做も者と念佛供養の仏者い大庵主とやらン並は那法遥は来會の人々も昨日事あり一よりその処は止宿のよりとぞ知りく事の仔細を尋問ふべく且君命を携んん為は馬を飛して来ゆるとも三門をうち開く對面せられよとぞ喚ける照文の夥兵伴當們はそれを聞て目を注もて素破敵とて寄せくとく昨宵准備は竹藪ら竹を伐く火は炙り各々淵衣の竹槍を挾む身を構て防ぎ戦んと欲もるを紀二六制ら退けく庫裏は走りゆく八犬士照文們は件のよりと注進も然ども犬士は亮も謀ぞ速は對面せぎは怯れさりと思れん箇様々々はもげれそ、大照文代四郎は示しく倶は立出けり開が中は信乃と親兵衛は三門の邊は赴く餘の犬士は庫裏を距ること二十間許はしく苔生る秘尾石の中程は在りその後方は、大法師の左右は従ふ照文と代四郎在り又照文の伴當夥兵們は竹槍を棄列を整て六犬士の左右は侍り紀二六ら信乃親兵衛は従て又三門へ赴く生口毎は乃那這る樹の下は穀れ

八犬士を逐く
朝重
結城より到る

たり。その為体武備儼然士卒二十名ゐ足らぬれども。數萬騎竜蟠る城郭ゐ少なるまでくだ
ひえ。うけ。當下信乃と親兵衛ゐ倶ゐ三門の裡面ゐ在り。隨即紀二六をもて答るゐ小山殿ゐ
のまうさえ。知らず。如くもの処ゐ、大庵主八犬士並ゐ蜜崎十一郎照文姥雪代四郎與
保仁主僕甲乙二十八名昨日より止宿あり。来命を受て久し。國守のおん使ゐいで三門を
うち開いて。入れまゐらせる。該ゐれども。いふせん這門酷く傾ぶれば開くべもいざ我們這里へ
立寄りて折角門の敗れる処より入ゐ。ゐ。ゐの義を亮査あれ。とゐ聲爽やそ委ねゐを朝
重具ゐうち听て。又伴若黨ども。ゐ。答るゐ。趣ゐ。但。當國守の使ゐ。ゐ角門
より入られゐ。ゐ。開ゐ君命を辱ゐ。似て。面正しくも。ゐ。所ゐ。今ゐの寺院ゐ在宿せゐ。八犬士と
やらんゐヨ力の少年。これゐ。と。狡風聲ゐ。ゐて粗知れり。倘ゐの言実ゐ。ゐ。這三門の傾ぶた
ゐを。推正しく開れんや。ゐの義ちく及ぶ。角門より出迎て。對面せゐやと喚ゐを。親兵
衛守ゐ。ゐ。勃然とく。みづから急ゐ答ゐ。趣ゐの意。ゐ。ゐ八犬士のヨ力ゐ。獨

その少年のさゐ。ゐ。昔の義秀親衡ゐ十二倍ゐ。ゐ。ゐ。就中大田小文五ゐ。暴ゐ越
路ゐ旅宿の折暴ゐ牛と度ゐ駐めく面色変らぬ自若たり。然ば這傾ぶる三門を。
推正しく開ゐ。と易ゐ。ゐ。べけれども。小ゐ。ゐ小山殿の為ゐ門卒ゐ做ゐ似て面正しくも。ゐ。
所ゐ。ゐ所詮角門より入ゐ。とゐ。ゐ。目今這門を推倒して廣ゐ。ゐ客を迎ゐ壁ゐ撲
きゐひそと。解誇りて。三門の柱へ。ゐ。ゐを揖て。推せば忽地揺々と揺動ゐ尾隧碎けて覆ゐへ
くゐ。ゐ。ゐ。朝重驚ゐ。聲高ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。非如ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。廢院ゐ。ゐ。我身一箇の
所以をもく。這三門を破却せ。れば。後世の罪障免れ。ゐけ。我謬ゐ卒然ゐ。角門より入ゐ
けれと勸解ゐ。親兵衛冷笑ひく。卒と。信乃と共侶ゐ犬士の隊ゐ退ぶけり。登時紀二六ゐ
ろゐく。三門の傍ゐ。件の小門を開く程ゐ朝重馬より下立て。ヨヲ。ゐ。駄兵伴當。皆門外ゐ
笛置く。絶ゐ両個の伴若黨と東西持る奴隷二名と鞋奴とのみ従て角門より入来ゐを。
とゐれば。年齢い五十許ゐて。その骨相ゐ。ゐ。身ゐ。縹絋繻の夾衣ゐ。唐織の戰外套を披

下に青葱純子に黒紋下間道なる野袴穿て白柄に螺鈿鞋の両刀を腰に帯る汗衫の上に黒草絨の身甲あり網鎧に銀の鋲打る臂縛袖の端より顕れる又八犬士照文代四郎は昨日の仮なる彩装なく野袴の織色両刀の表装も各同じくねども皆千金の鋭刃を帯る人も咸千金その打扮と今あれ小山朝重に方れば二の町に似て二の町なるを骨相都て弥優て遒一人當千の勇士なるをとゝゆるあらんや曩に甲斐の指月院にて才に信乃と道節が武田信昌主に見参の折ざまも看官誉ざるべしの日を八士具足して且従類もヨメりをば英氣先度に十倍して晴やかなる對面に然れば躬方の野兵伴當们は思ふも似ず結城より来りし討隊の軍兵なるべし呂平和の使者なれば幸なるかなと含笑て言の仔細を听まく欲あさぶ各耳を傾けり却説小山朝重は樹下に毅然たる躬方の僧俗と尻目かけて髦石の中央を徐々と来る程に、大法師は照文と代四郎を左右に従へ立迎へて且法名を告て對面あり来意什麼と尋れば朝重答て某は結城同宗の老黨なる小山大夫次郎朝重是なる君命にて各に尋問ふべし一義あり那犬士とやらん宕えなる八個の施主も在宿らむ迭に坐して談ぜんとのたまへば後方なるべし推乃なる草席十枚に東西程なく布並れば犬士も亦找に坐して朝重は對面を這廢院の庫裏あれども朽敗れて壁ぶ如く白屋いと陜くて舊なる隨に荒れ膝を容るに処なく主客の席に准備届ぬ朝重の脱落なるを人々都て感じけり偖而主客揖讓して俱に程なく坐を占ぬ朝重は大なるに向て只今尋問人とのたまへば則是別義なく和僧は嘉吉の役に躬方戦歿の菩提の為とて結城の古戦場に庵を締びて昨日結願供類の折十個の法師来會あり法延と相資け且施主あり貪民乞児を賑したるあるぞと問ふに、大なるに聴て然しは那先亡の菩提を吊ひ我舊君里見殿の先考季基主法號義烈院殿を首めて故當國守氏朝主並に列将士卒の為に宿願昨日成就なれど敢他の施主の帮助を討ぎまく思ふまの弐安房へ赴くなり。情地に遣されける代香使這蛮崎照文に齎さまく布施の金

す
子あり。拙僧素より寡欲ゆく然る東西を欲せざれば。この時照文語を紹て某大士と相討て
殘さず施約ふ雪ぬるさと告れば、大又の安う昨日法筵を資ける十個の法師ハ舊識ゆ
ねど招むして来會せれ且石塔婆を一夜の間ふ造り出されし奇工あり其長老ハ能化院の星
額とろ守るのみ寺ハ那里ふあるやらん开ち吟漏しひき小ろふ昨日城内より緝捕の士卒うち
向ふと守ゑて折那長老ハ徒弟と共侶ふいくぐ寄隊と和解んと开ゞ途へ出迎へしその隊ハ
頭人長城生が摘捕りあれと吟るのみと告るを朝重ち吟て小らゞ又大士達とゆ。何なもれ故ふ
當家の士卒と逸正寺の法師們をヨヲく虜ふせられしやと問へば道郎毛野莊介現ハ小文吾大
角ハ經稜素頼惡利ゞ德用を帮助る詐偽の緝捕のゆ。両所の茂林の戰ひを箇様々々と
鮮示しと我們ハ始より人と爭ふ心ゆ。遮莫殘忍奸虐る悪僧俗們ふ失れん命惜しち已
ゑとゆゞ他們を虜ふ者れゞゆ。敵一人も敢殺さずゆの地を遠く立去ざりしハ國守の處分ふ依ん
とてんちの弐を查しゆへりと異口同様ふ朔況ハ信乃ハ亦德用を俘囚ふあけふ為体及路傍

矮堂る石地藏の利益奇特の崖畧を倦々るりゆと告るふゆ。親兵衛ハ七犬士ふ後れて昨日
這地ふ来ふけ。左右川の邊ゆ、大代四郎照文主僕の危窮を救ひ當日のゆ及一路兒孝
嗣们三人ハ那川の圮橋ゆ惡利ゞ伏兵の鐵砲ふ撃れ水ふ陷て嚴も住めぞるりしるゆ。その折風
霾ゆ天の祐ゆ惡利ゞ隊兵们ハ或ハ同士撃し或ハ水中へ滾陷て死活ハ知らゞ做りしゆ
詳ふ陳示しと又ゆ。我一路兒孝嗣次圉太郷三ハ莫逆知音の良友ゆ忠孝義俠
傳罕之介るふ寃家惡利を撃ち漏しられゞ送恨今ゆる方るし。那惡利を解死人ふ
ふく怨ゆ雪ん為ふ姑且這里ふ露宿ゆく國守の處分ゆ依ん道郎聲高やふ
我們既ふ商議ゆ。那惡利們ゞ罪を糾しゆ我們ハ遽與し賜り且星額長老師弟を放
ちくその寺ふかへされゞ生拘る經稜素頼德用堅削們を返しゆ。然らゞハ今面前ふ生
口毎の首撃ゆ落しく怨ゆ雪んハふゆと惡るゆ信乃ハ推禁め朝重ち向ひて今親兵衛
がらゞしゞく撃ゆ克ハ敵るゆ殺さゞりしハ豫より、大庵主の教諭あれハ先亡菩提の

本意を忘れて殺伐を宗とせざ然らでも仁義はあらぬぞと動さら我々が本性都く
かくの如く人々とそ二個の友と好悪人は亡れて猶是をも忍ぶべくは亦何事をか忍ざる
言聴れるべ辛ひるゝんと緩急各理を盡く残る所いなるゝと朝重熟所果て感を感と
大々さるべき為は貌を改め悄然として答る曰家は暴戻の臣あれ是則主君の恥へ今番
経稜素頼惴利们並は逆足寺の住持徳用が非理非法の挙動へ故あて昨日より當
城内は少えるべ某則君命はより各の足跡を赶索して越は對面を汚るかひは支の合戦を
知まく欲くて胡意来路を問試は豫我守趣と異るべき抑里見殿の先君季甘基朝
臣は我先君故判官朝紙と同義烈の良将也交も亦浅らざ倶は嘉吉の役は戰歿の後
年を歴て當家再興の喜びありとへども乱れる世の舟車届らで好を安房は結ぶは由なく
遠くもあらぬ筑藩屏るゝ胡越のごく疎闊るゝは這回、大庵の念佛供類は嘉吉は戰
死の列将士卒の追薦の與はして且舊交を忘られざゝ自他平等の心操と成朝始より

少知べ法會を資くべらゝは庵主はゆゝえ諸君子も名利を斃心なく告られざまでは是
非は及ぶ分るは逸足寺の住持徳用當家の驕臣經稜素頼惴利们敢あの毛筋
思はとるく妒忌の邪念を挾て城より向ひ緝捕使と誘り猛可はヨヌ勢を駈催く庵
主並は来會の諸君子を推捕へんと欲せは友て他们は生擒られて恥を當城は貽は至
る言語同断の僻事あれ縦諸君子の愁訴るとも允されるは罪人なぶ中は長城枕
之介惴利い乱妨の折犬江主は馬を撻れて人馬共倍左右川へ陷れども流れく川下より
岸は登りく其頭は相識る村の長剛九郎と喚做き者の家は立寄く水は弱ゝ馬を
勦らぶ濡れる衣裳を火は炙らく敗軍のようと告ゝは剛九郎は推驚と倡く盃茂
蔦る程は主客共倍は乱醉まく口角をあべゝ這果は惴利怯ぶゝ刀を拔て斫んを
あは醉くる者の癖るれば鈍や刀と桃捉られて反く剛九郎は首を斃落され剛九郎も亦
國守の家臣を斫殺まゝを後悔く免れくと思ひけん即坐は自殺をうけ是はより近

げぢよ
えもと
多くは酔ひ利かず
剛の九郎は砂
らんとも

どう九郎

隣の荘客们驚謀ぶて時を移さぬ城内へ告許あく件のよりを稟き折ふ経稜素頼
ゞ列卒伴當及惴利の暇兵も逃て城内へかへりもヨマくあて隨即其者毎の許ホよ
アく件の僧俗の僻事ゆえ和殿们の武勇風霊貍の奇瑰経稜素頼徳用们ゞ生
拘れる事まで。その崖略を守り知りしべ猶も堅ホあく糺問あそらくその実を知ふ有徳
アり程ホ逸足寺の先住未得老僧轎子と飛ゝつ城内へ参上りて佛の利益冥罰と箇
様々々と恐らる是ホよりて那怪風い庵主並ホ諸君すの為ホ天助の奇特を知られ皆是凡
人ゑ所ホ及ぶを。主君成朝感心の有餘各位を迂蒐て宜ゝく謝せよと命せられる来意ハ
都てかくの如ゝ件の経稜素頼惴利い常ホ雁鳥を放ち田圃を損ふ驕放るる守えるれホあ
らねども他们ゞ親い忠義の老黨ホて。嘉吉ホ戰死の誉あり又逸足寺の徳用ホ出家
人ホ相応ゝ武勇力ゆゝ武藝を好むと折々人の噂ゑ成朝これを知るとへども他い當
家再興の日京都の管領ホ内縁ゆて。熟成稟ホ功あれば甲乙俱ホ用捨せられとさる

然ども他们い思いぐ大ゝ云ふ僻事とあいぐたら然ども寺ひホ同士鬬ゑとあらゝ
のゝゑ各位の伴當とゞホ害ふるホ至ゝざるゝホ惴利ぞらい犬江生の一路兒を三個ホて鬬
陷ゝけ宜罰ふるゝむ那身い村長剛九郎ホ斫殺され因果覿面諸君子今那首級を
撿ゝて其友達の與ホゝも怨をいゝぐ解のひれとのひゝく後方とたゝへて伴若黨ゞ携ゆた
ホ袱裏ゑ解披せゝく歩きを視れば首級を斂めてあり見れば
、大照文代四郎们及八犬士も照文の伴當騎兵も駭嘆して天理の當ホ恁あべきを
感ぜざるホいゝけり登時朝重又い母ゝ事の湊合是のゝゝぞ前ホも各ホ告ゝゝ未得
老隱居ホ對面して又那奇特をえゝゝ。とゝひて又伴若黨ホ箇様々々と吩咐れば
るる果て門外へ遽ゝく出ホけり。ホ程ホ逸足寺の先住未得老僧ハ嚮ホ小山朝重と俱ホ
来て。這廢院の門前ホ轎子と歇て在りゝホ今朝重ホ招れて轎子と立ぬゝ。両個の喝
食ホ技掖ゑ東西ゑ載ゝ吊臺十荷ホ十枚の大袱ゝゝ被ゝゝ夫役二十名ホ肩擔

せく。主客の席ふ來よければ。大法師ハ立迎く。迭の口誼果て後八犬士照文代四郎も對面く請て席を薦れば。朝重も亦詞を添く。儲の草席ふ坐らせけり。當下未得ハ、大法師と八犬士們ふ告るやう。今番法弟德用們ぶ非道非理の計較を拉僧毎ゞ知て只願諷諫の詞を盡ゝども。他のこゝろぞ件の非道を資る三個の檀越ハ圉守譜第社重臣ゐれば千言萬句も聽れざゝ。こゝろ歎ていひふ那人々ハ事の閑場ふ庵主の法筵ふ來會ゐる。師弟十個の法師達の隊ふ捕捕ゝ折我寺血氣の悪衆徒十名ぶ旅背力ふ乗ゝ。肩ふうち載ゝ。毎く寺ふ歸て由紀く。閉ゝ龍んとそいそゝふ那師弟十個の法師達ハ路ゆく猛可ふ重くゐゝく。遂ふ堪ゝかりければ悪僧毎ハ壁伏られて反起んとゐゝども。幾十畳反あるやうん身を動をと克ゝ各嘘ゝ苦ゝそ人の扶助を求る折ゝ其ハ頭を過る里人ゝ怪ゝゐ立ゝて。親れハ件の悪法師們ハ各々石地藏を背へ乗せく。道路ふ平張伏ゐく在ゝ。ゝ里人ゝゝく訝ゝく。賊てその地藏菩薩を會御さんとしてけるふ怪ゝむゝ。

皆その背へ漆をゝく粘ゐどく。抬れハ那身も俱ふ抬げられく。臺も離れざゐを必神佛の祟ゐんと怕れる。里人寺へ走り來く。支の趣を告ゝ。拉僧驚ゝ且訝ゝ。時を移さぞ轎子ふうち駕ゝ舁走ゝく。其里を迫ゝく檢ゝ。現虚談ふあゐ。ゝけ悪僧十個の懺悔ふゐく事詳ふ知ゝ。伴當を寺へ遣ゝく。猛可ふ十荷の吊臺を門前る莊客們ふ舁ゝ來ゝ。十們の衆徒を十躰の石地藏と俱ふ吊臺ふうち載せて賊く城内へ舁てゐゐく。年來師檀の好ある小山主ふ直訴をけるふ小山主驚ゝく。這里も亦怎る情由ゐ。長城惴利ゞ横死の許あり。且經稜素頼惴利ゞ伴當暇兵們の自愬招ゝゆく。自他の邪正分明るれば。火佛の出示り疑ふべゝ。爭く大とその毎を赶蒐て謝せゝとある館の御諚を。謹奉ゐ。猶又御坊の告訴のゝを。ゆゝえあげて又ゐ下知ゝ。ゝ來ゝく打立ゝ。御坊も件の悪法師們を俱ゝて共侶ふ由紀ゆゝくゝ。昨宵ハ宿所ふ歌置れ心利る雑兵四名と。関宿千住の両路筋へ走ゝ。遣ゝく。庵主並ふ諸君子の往方と

索求められて不這廢院不止宿のより。天明て後不ゆくえ。小山主不従ふく轎子城いそぎ〻。俱不這の門前不来て。案内を乞ふ。拙僧さへ不面伏るゝ。実不讎悔て為る。先や件の悪僧們を。目不かけ。座より喝食達那吊臺を。幷寄せ。とらへ。夫役們うち。雪て。吊臺都て。寄せ並べ。椙〻る。袱と。褰袱くると。覩れば。悪僧們い。皆石地藏と。駝る。依て。仰反り。苦る。眼を。睜り。歯を。切る。真四訓を。校ふ。佛いろ〻。せとく。蓮臺。ゑ。ゆ。吊臺不。地獄の。呵責も。恁やと。思ふ。猶。正。照据。あり。嚮ふ。大の星額ふ。贈ひ。好虐破戒の。先非を。悔〻。思ひけり。

第百二十九回

忠僕死ふ事る霊佛の起本　孝子京を去る傳燈の法脉

登時又未得のゆゑ。這悪僧們が受る。真四訓を。人々面前不。ひろげ。知るまじ。所あり。抑ゆの石地藏十體い。曩ふ結城の家再興の折。當君成朝、主の志願を。先亡義烈の諸大將。忠死の士。卒の菩提の為ふ建立せ。れ。御佛是。始い這廢院を再興。て。居ます。とられ。て。徳用が。喫醋く。思ひけ。屋禀。掠めふ。より。遂ふ。その義を。停止せられて。我寺ふ建立。ゆひけり。今ゆ。思ひ合。るふ。ゆる。日我寺。る。這地藏菩薩十體。倶ふ。忽然。とゆえ。ゆ。ざる。とある。ンどゆ。者。のあり。かど。実事。ゑ。ゝ。ぢ。恵ひ。よ。果て。侍る。灵応あり。拙僧昨日中。途ゆく。ゆの。弐。と。思ひ。出。ゝ。ば。伴當。と。寺へ。か。へ。ぢ。折。那十體の石地藏。尊を。とく。尺。て。来。と。て。遣ゑ。ふ。十體。ゑ。ゝ。ゆえ。ゆ。ぢ。とい。ひ。ゑ。ゝ。ば。是。ゆの。御佛。達い。則。是。我寺。ゆ。石地藏。ふ。疑ひ。ゝ。就て。又。告。ま。ゝ。ま。べ。ゆ。ま。ひ。抑這廢院。ひ。ゝ。結城の乃祖。ゆ。ふ。七郎

朝光主の建立ゐく。六道山能化院教主寺と唱做くる。七堂伽藍の大刹ゐりーゐ。喜吉の兵火ゐ焼亡れてからの如くゐ荒果ゐ。當寺の本尊勝軍地藏菩薩い平將門の女兒ゐりけ。姉藏尼の作ゐると。我寺ゐ迎執りなりく。秘佛として宝藏ゐ在りとらひて樹の下ゐとゑくて。那德用い我徒弟ゐるゐ徒ゐうんいそぐりけれども。他ゐ各位ゐ俘囚ゐせらまく。這荒川寺ゐ奉れーと思ふゐ曩ゐ國守の這寺と再興の沙汰ありー時德用ゐ遮りく。禁めゐ稟ゐ悪報ゐく。那身と俱ゐ同悪ゐる僧俗都て懲されけむ願ゐ庵主怨と云れてゐの御佛達ゐ勸解と做ーのりーば千僧の萬部の讀經ゐ弥優ーて必納受ゐゆうんいそぐと老僧の慈悲い涙ゐ顕まく。請求めつ他事ゐ云を、大法師ゐ感嘆ーく。則未得ゐ答るゐ。爰ゐ肇てゐの廢院の来歴縁故と守知りく。思ひ合ゐるとて云ひ鄙ゐ拙僧。那長老星額師ゐ訪れ。折その在住の寺の名と能化院と狹りくるゐ。結城城下七寺院ゐそと猜ーと問も質さでりーゐ原来件の能化院ゐの廢院のゐりゐ。ゐるゐ化現ゐゆひける。這十體の石地藏い逸疋寺ゐ置れゆゐと。能化院と告られ。い當初國守の發願ゐゐの地ゐ建立做ーまゐるーせ。ゐりー由縁と并ぶ隨ゐ地藏菩薩七靈場なる。基と示さゆゐりるーむ然ぐとゐれ那法名の星額い是地藏尊の額ゐと云ゐ黒子ゐと。俗ゐゐ地藏星ゐべー。又その師父の法名と宝珠とゐゐられゐ。當ゐ地藏の持せゆゐ麻る尼宝珠のようるゐ。今ゐ昏くゐ悟りゐ。佛法廣大無邊ゐ量の善巧方便不可思議ゐるゐ。仰ぐべー信ぐべーと口ゐ唱稱讃礼拜ーて。身と起ーて吊堂ゐる。十個の悪僧ゐうち向ひく。懺悔と萬ゐ業果と示ゐて地藏經一巻と徐ゐ讀誦ゐて。放免祈請の眼と閉合ゐるゐ悪僧們ゐ十念と授けーゐ破戒の罪障解脱ゐ十體の石地藏い那身ゐと離れゆゐて苦患とゐゐ。尚起べるゐ。ければ朝重隨即夫役ゐ下知ーて地藏と俱ゐ悪僧們を載ゐ伏ゐ吊堂と舁ーて先城内へ遣ゐ折未得い那經巻と。五十金の来歴を肇て、大ゐ守知りて返ーまゐーせんと。

志ざ。大い決して諾いぎ後竟ふ逸正寺の什物ゆを做ふけ。然び再度の奇異霊怪
大士仏い餘談と惜まど。開が中ふ信乃い亦語次ゆ未得ふいゆ。前ゆ解示ーゆらる那左
右川ふ程遠ゆ路傍小堂ゆる石地蔵の背ゆ建立の歳月をを。嘉吉元年七月二十
四日。建立願主浄西と勒ーゆ。その浄西い法名ゆゆむ本貫那里の人氏ゆゆ。坐も及せ玉
ふ狭と問へ未得い領ゆ答てその浄西のゆいゆる。拙僧故ゆて具ふ知れり。他い和君達の先
え。君ゆ里見季基主の馬の鑣奴ゆ十十八と喚れ者ゆ身い卑賤くて數ゆねども。その
性い美ゆて。人の及び奴忠心あれば。季基主戰歿の折ゆも馬の邊と毫も離れず。その
身も痛痍を負ゆ。敵ふいゆご知られ奴程主君自殺の亡骸と肩ふ引掛け命と免
ふ。近い山林ふ迹と埋め。當晩季基主の亡骸と煙ふ做ーゆ。寄隊の大軍退去
ア後。有一夜十十八ゆ。主君の骨壷と紀の大刀と甲冑と搭駝ひゆ。我寺ふ潜来ゆ。悄
地ふ憑ゆ。椿事あり。と倡て住持ふ對面と請ひふけり。その時逸正寺い我師の坊

住職ゆければ。訝りゆ。ゆ十十八を。方丈ふ召入れて。隨即對面せられけり。當下十十八ゆ。其身の
素生箇様々々と。首より鮮諦して。季基主戰死の折の光景と告知せと。半晌許。
然而いゆ。ひと鳥滸がましくひへども。小可已ゆ。情願あり。這主君の白骨と這紀の両種と
悄地ふ御寺ふ執置て。菩提ゆと。允ーゆ。薄少ゆ布施として。圓金三十両を献らむ。此い
是主君季基朝臣鎧の脇鍔ふ藏め。措れと。後ふ小可見出ーゆ。且小可を御弟子ふ做
ゆ。祝髮得度の願ひと果さば。生涯貴寺ふ留りて。火打水汲と。笠帝食ふ。大馬の
力と盡せ。いらでと。件の金と。薦めくゆと。麻ゆ身と投伏ゆ。請求ゆ。他事ゆけ。
師の坊ふ願感心ゆて。奴隷ゆ。ゆゆ。結城氏滅亡ゆ。當時い
事皆両管領の處分ふ依ゆ。ゆの。ゆけれ心ふ儘ーゆと。叮嚀ふ諭ゆ。祝髮ゆ
我い障りゆ。そも。願ひの隨意ゆ。但ー那龍城の諸大將の亡骸と。今我寺ふ葬らん
ゆ。憚ゆ。ゆ。ゆれい後難実ふ料りゆ。汝然いまで。ふ思ひゆ。その金ゆ。ゆ幸ひゆ。

當山より遠くもあらぬ武井左右川の頭なるを此の墓所を購求めて主の白骨を瘞め墓表を造り立て箇様々々ふ彷彿泄の本意ふ稱ふせん是より外ふ術あらじといれて十八沈吟あそ暫く思ひ沼さうけん貌を更め額を衝て仰羨りゆ放然らば先祝髪友の願ひをとそと喜ぶそ幷ぶ仮止宿を允されて次の日本そるの御前ふ剃髪ふ義をめせられて法名を浄西と喚做され血脈度牒袈裟法衣一具を取くせのひらが十十八の浄西ハ師恩を拜謝して竟一両月逸足寺ふ在り竟ふ左右川の頭ふ行一間四方の地を購求ふ季基主の白骨と紀の武器二種を悄地ふ埋葬て墓表の與ふとて一軀の石地藏菩薩を石工ふ課て造りなりて細小る雨掩の御堂さへ建立まけるふ那金あるを思ひの隨ふ宿願を果しけり是より一と浄西ハ日毎ふ件の石地藏の御前ふ在て鉦を打鳴らして朝より暮るまで念佛の聲間斷なければ近辺村民往還の良賤相憐愍て錢を投與へ或ハ餅握飯などを取らるもありければ浄西ハ炊ねども饑ざるとなりけり。

約束の一條ハ當時拙僧弱齢ふて師の坊の侍者なりければ親しくそも考もしそその大略をなぞえり然ば又件の浄西ハ上毛なる舊里ふ留置る妻ありて尚仍ほ獨子さへ学類せ立てけれども一と度佛門ふ入りより浮世のなと思ひ捨て妻をも子をもなくてぞ稀なる風ふ便あも尉めせて過る程ふ十稔許の光陰を歴てその子ハ年才十二ふなりける春母親病て身故ありて馴ふ故郷ふ住不娯けん父を某ふつ辛くあて尋て上毛より來ふければ浄西驚ハ厭しゆふあるぞもがるとも思へども尚総角なる者を追遣ハ亦さまるぞ留置んと欲ふ。浄西ハ石地藏を建立の折よりまそ這廢院ハ地藏菩薩の霊跡なると思ふ故歩頽れ殘りし庫裏の背ふ最褊小なる白屋を締構て夜ハ寢処と做せるのミ子を艱ふてもあらざれば只ハ得その子を逸足寺ふ招て見て有徒る奴の舊里より尋来るを爭何ハせん願ふ頭を剃圓めて扱使れるべ幸ひなんとの義をハ捨て回報を那身ハ安からぬ去りぬとの後ふ考えけるその年の春先住ハ遷化て拙僧住持

るりければ那浄西が出家堅固の志操を豫ねて感じ思ひ入れば則他が所望の
隨意躰てその子に祝髪させて法名影西と唱ひ内典外典を讀学まるに一を聞て
二三を知る才の捷れたるのみならずその性孝心深からけれがその身のさぐる一食も親の為に
半分ちて暁毎に疾起出て三里にあまれる親の在処に赴き飯を餽りて天明ぬ程に寺に
還りて常の勤に就ると一日も懈怠なりーなれば初め人皆訝りて云云と沢もありーにその実
を尋ねて發覚れて拙僧に人の告ーなれば感心のあまりその夜分影西を召寄て倩孝行あると
雖も取ーなれば汝の饌を分ちて浄西が食料に日毎に取ーまべーとのたまへかど影西敢従はず有
かぬまで辱なく仰ぎ思へども然ーては親の心に悔ーなれば慈悲甲斐のなーんより只うち
罔ーぬひねと推辭く尚始のごく暁毎に餽ーかば拙僧いよいよ感佩ーて他が飯の足ざ
まに餓りやせと憐愍て只何とな折に觸て果子餅を取らせるに并ちなれば持く
出たく必親に餽りけり左右する程その次の年の春の時候より浄西に風眼を病ひ

づひて久しくなるまで愈ざければ影西只頻に憂ひ歎く夜毎に水に浴て身濯をしたく
神に佛に願言ーて已が身をもて親の病着に代らんとのみ念ーかども竟にその利益なくて
浄西に三目に成るに及び影西ひとしうち歎くよりて拙僧に告知ーて生涯親を看ーん為に
身の暇を請ひ給へ拙僧まさに憐愍て小ーば浄西を寺へ召寄さーて子舎を與へて粮せん
倩孝子といふーて乞食に做さべやとて連りに林泉に尉めーて影西泣く泣く美引にその
義に願ひ亭示さんと豫思ひ寄幾番とな親に薦めーに只一応なる氣質に徇れば然
あれい心安くなべとく従べくもいなぎ猶その上のあり慈悲に身の暇を賜るべーとて恩を謝ー
別を告く飄然として出てあれけり影西曩に剃髪て當寺に在ること三稔に過ぎ年を
絶に十三なれども親の為に乞食ーて一毫も艱苦を歎ぎ始故郷に在りけ日他が母
親に仕へーも倩ありけんと猜せる実に泣く孝子と介程に影西の親と俱に那路傍小
堂なる石地蔵の御前に在て往還の人に憐愍を乞ーて日を消ーて親のなを扶掖く

這里の自屋ふかく籠つ。玄冬の寒けれ日に着る襤褸と悄地ふ脱て親ふ被て熟睡
まるまで。身をとりくゝの脚を温め。又三伏の暑に宵い親の為ふ終夜蚊を拂ひて睡る
こと稀なり。偖而年来を歴る程ふ。ふの遠近ふ皆ゝ人ふ知れて孝幼小僧と唤做
ん。那路傍小堂の頭を過る男女い必錢を取せ東西を與て恩とせぬ憐ざる者なし
アーるが只日毎ふ親子の口を餬ふのみふあらぎーて求めざれどもその折々ふ故衣るども沿易く
るる風浄西が明を失ひより。又六七年の光陰を送りて寛正の初の年間浄西い豫より死
期を知て。影西ふあらゆさつ遺言をけるふ果ーてその日ふるりければ病苦もあらぬ端然と
合掌十念の聲の中ふ瞑を原像く息絶ける。影西哀慕悲泣ふ堪ぎ然而あるべきふあ
らざれば則父の遺言ふ従ひて。那路傍小堂る石地蔵その側ふ安葬て。松を栽て標と
も。敢墓碑を建立せぬ。ふも父の志ふ背ぬ。遠近人その柩を送る者幾百
幾千るを知ぬ。されば與ふ茶を賣り。餉糧米を粥ふ經紀さへその四下ふ少ーとぞ。ふの

ふ逸足寺へ行ぬ。拙僧則浄西が為ふ衆徒を聚合て。三人日の讀經を修行し
且前約の如く。影西を寺へ召執んと欲ぬ。親の在り一日のごく日毎ふ石
地蔵の御前ふ跂坐て。鉦を鳴ーて念佛を唱ること暮月ふて既ふ親の服闋ーかぬ逸
足寺ふかへ來て。因を謝ーて学寮ふ在り是よりーて影西い夜ふ日ふ佛学を研究ーて
又五七年を歴ふければ本山屬院の衆徒いさへ約莫下總一國ふ他が右ふ少る者なし
ゆく拙僧い寺職を影西ふ讓りく退隱せまく思ひふ徳用い師兄ふく。且結城の家再
興の折京都の管領へ俗縁の義をもて提撕稟ぬ。功ある是ふ加るふ城内多重職
堅名長城根生野るゝど年来徳用と方外酒飯の友ヨメられば後住の一説い左ふ右ふ
拙僧の意ふ儘せぬ只得寺職を徳用ふ讓渡ぬ。心術正ぬ檀方是非ふ明
るる。同学の法師們い俱ふ不平の心あり。徳用これを嚮影悒く思ひて遂ふ事を假托てその
法師們を追出し。剰悄地ふ影西を毒殺せまく欲ぬ。影西を毒氣色ふ猜ーく

忠孝の父子
路傍小堂
佛前の供養

淨西

辭し去て京師に赴く更に八宗を兼学ぶそ。智識の学えあるとして。某の法親王の執事に成れて。權僧正に成登る因既にその高貴きと。拙僧をンどが今ゆふ。企及べく死に
あらねども。今番の異変を告知して。後住の弟を憑るべ影西本性孝順る。永く勢利を愛せびしく。今の顕職を辭し稟し。必這地にかへる来て。我寺の法燈を紹ぐべ。有恁る美談ふいへ那浄西のゆくも問れてその子れ上すくも詳ふせざるとを汲び。主客地上に坐しるる。思ひ遣せる長談ふさ。傷痛うを饒しめ。どうち陪話れば八個の犬士、大代四郎照文主僕に至るまで。倶に感嘆の聲を合しく。奇也々々と稱そ。居開が中に信乃がらを。原来那浄西い始我思ひ。里見に由縁あるを。親子卑る。忠孝を守けがらめるをっけれ然る忠僕の剃髪して亡君の菩提の為に建立ある。石地藏るべ那衰老法師に化現しく我毎に忠告の利益い俗に云縁る。衆生を度るの義あるべ因く今亦思惟るに那路傍小堂るの石地藏の面部に缺る処あ

ふ。件の願主浄西ゲ明の失るに類るの欠その側に栽ち。一樹の松を。浄西の墓表るとんとの。ご知るよ。るやしば廻向せば。悔さよといへ毛野も亦ら。郷に紀二六が自屋に。つげ告る一個の法師い眼を閉柱に凭れて。喚べども応せざるとひを思へ開そ浄西の在り形貌を顕示ち。亡魂のやあるけんかといへ親任衛點頭て。咱ども中途に。庵主の急難告と告知ける那法師も亦浄西の灵魂欠と思へども其法師い齢二十あまりそ色白くえる。開を浄西に思ひ方れば三十許も弱べ。年齢相応かるれば那灵魂にあるとは亦伏姫神の神変不測の灵応欠そもあるる欠。智力とのそ目今量り知るべ。是ものの奇異を。後に至りて思ひ合るるやあるといへ。荘公大角現八小文吾道節照文代四郎。孰る正可に思ひるべ。倶に感る朝重い人の噂に。知る浄西親子の忠孝に猶も新奇の灵佛利益を。今ゆふ又嘆唱を。時の移るを知るざるけり。當下、大い未得に向く。聆新る浄西親子の忠孝に美談に就て。

文溪堂藏

告まゐらせべ一奇事あり。倘京師なる影西僧正が師父未得の招紀を美容れてかへり来ゆ日もあらば言伝てあひねかし。その故い箇様〻〻と那星額の齋〻家。李基主の白骨と徂公の刀の事。詳ふ解示ゐく。初拙僧結城ふ来て庵を締ぶ比ろ〻〻我先え君の墳墓の有や無やと思ひ難て人ふ問へ索ねーかるも竟ふ知るこるそーふ憶ゆるあらぎ白骨と紀の大刀と泛そけふ開も亦南柯の夢ふ似く。その白骨と名刀の出る処を今ぞ知る。佛の利益のへばゆ〻浄西法師の賜ゆめ。そ墓表の石地藏の化現の霊異ゐもり〻〻齋〻ゆ〻〻別佛屯。曩ふ園守の建立と宮く地藏菩薩の化現ふ。ゐれが事齟齬ゐふ似ゐれども。萬佛原是一佛ゆく。地藏菩薩ふ両箇ゐと。壁ば田毎ふ移る月の影幾ゆもゐ。ゐもども。真の月をゐち仰げば只一輪ゐぶ如〻。その理をゐく推ゐ。ゐ逸足寺と路傍小堂と自他十一箇の地藏尊利益ハ則一灵佛屯。今ゆ〻分別ゐべ〻ぞ。我先え君の白骨と紀の大刀ハ土中と出く。安房ふ赴紀ゐども。ゐ一種の紀の鎧永くその地ふ送

ゐめ。墳墓空〻ぞ。後ふ古迹とゐ思へ。那僧正ふ對面ゐて是ゐのうと云云と告ゐぶさぞゐ欲ゐえその欲びと面前ふ過ゐん送憾〻さとその意を使へゐ。と憑めべ未得も朝重も又這奇談ふ駭嘆〻く。醉ゐぶどく醒ゐぶどく只共侶ふ感服ゐく。ゐ〻ゐ〻ゐ稱えゐ。姑且〻く未得ハ亦〻大と八大士们ふ談ゐゆ。那白骨の一條ゐ亦是奇中の一大奇事ゆ。庵主の佛意ふ稱ひゆゐる德の高紀を知ゐふ足ゐ。就て德用堅削们及堅名根生野不良の僧俗都て俘囚ふせられれども前ふも既ふ陪話ゆ紀他们ゐ一個もん身方ふ淺痍ども負〻ゐ泛ざ〻〻〻かゐ罪饒さるべやいむ但那長城惴刹の殺害の罪免れ〻けれども那身ハ村長剛九郎ゐ為ふ首と喪ひられば自業自得とゐつべ。伏て願ふ那僧俗。放ちゆゐ幸ひゐ〻んと勸解れば、大ハ點頭て。そゐ亦愚意も相同ゐ。八士の意見ハ〻ゐゆねども。拙僧年来の志願と果ゐ。念佛供類の作善と忘ゐて。執念深人を怨んや。とゐひゐ傍とゐ〻て各ゐの義を何と思ふと向へば道節先

答て我们他郷の旅客ゆえ。權勢もなく。羽翼もなければ。賞罰訓の圉守の隨ゆえ。敢恣ゆ
せんとゆあらば。倘結城殿良将なるにて。口その家臣と封邑の法師们を見省のまゆえ。自他の
邪正を糾さとなく。討隊の士卒と差向られば。我们只得及ゆ讐敵て。人をも殺し身を
殺さんゆ幸ひして。穏當なる。冢臣と使節とをく。事の仔細を問れゆ。照据既ゆ分明ゆえ。
我们ゆ罪なきよりと。詳ゆ知られば。実ゆ意外の造化。犬江が意見いかゆそゆえ。向ゆ親
兵衛ゆあいぎえゆ。勿論の事かゆ。那惱利い他人の為ゆ。毀られて命を隕しうとく。我怨
さへ解るべえゆ。唐山の鄙諺ゆ張公酒を喫ぬまば本子八が醉ふとゆふ。狗骨
折く雁鳥ゆ捉られ。怒と移さば不狂人も倶ゆ是走る。犬阪犬田犬川ゆ別誂なゆ。却
已なく宜く計ひあへと云。親兵衛かくの如くなれば。誰ゆ亦異議をば皆共侶ゆ朝重ゆ
うち向ひて目今の誂を守ゆ。狡圉守賢明の憲断ゆよりて。我们ゆ罪なきよりと知らま
なりーゆ。面目欺び何事ゆ是ゆ優ゆ。但し生擒の僧俗を那伊遮與ーゆ。

ゆらせば。守ゆ賞罰訓なゆ似て。非礼ゆそゆ。解饒ゆ。
決して獻しうべ。他们ゆ都て罪人。然が各の撰る索ゆ我君命を奉りく撰る索ゆ
異なるぞ。那伊ゆ為く退るべ。主君かさて。那霊佛の一々さるゆ利益のよりゆ。
主ゆも各位ゆ。對面せまく欲しかるべく。恁る名僧良臣とヨヌく沿ゆひ。里見殿の武
徳を羨しく思れん。權且結城へ立かるゆ。逗留ゆが幸ひなんとゆを。大士ゆ諾なゆ。
辱くゆへども。庵主ゆ先君の白骨を馳なりゆへ。只管去向をいそぐ。我们ゆ故ゆて。犬
江親兵衛と除くの外ゆまず。主君ゆ見参せば。這回ゆ。時至りて。八人送なゆ相伴て。
安房へ赴く旅なれば。不本意なるゆ。結城へかりて。賢君親疎ゆ私なば。憲断の欺びと。
稟きとゆ。沿ざるゆの義宜く執達の芳情と仰ぐのと。一個々々ゆ語と續く異口同
様ゆ辭ひ。大照文代四郎さへ留るべくもあるされば。朝重有數ゆ強るゆ。切く諸
川の酒樓ゆ。留別の酒杯を薦めまほしく思へども。私の面會なるゆ君命の使价ゆく。

且ゝヨヌの法罪人を牽めく退るに愚意ゐ儘せぞ卒介ゐそとち陪話れぞ犬士も亦慇懃ゐいぐかい然る弟あらん苟且るぐら主客の礼あり先立ゆへといそぐせば朝重隨即外面る野兵們を召入れて経稜素頼徳用們の僧俗如干の罪人の壱ゝを令ゝ牽立さぞく且門外へ出し遣ゝく然而未得と共侶ゐ、大八犬照文們ゐ告別ゐ身を起して角門より出て曳げ多設る伴當們ゐ馬を牽向け轎子を抬げ寄せゝ相迎て倶して結城へ還のけゐ介程ゐ八犬士ハ、大照文代四郎と共侶ゐ古日れ首尾を欺じゐ一霎時庫裏ゐ退ぞく身甲臂縛蹤繳の武具を脱ぞて庸常る逆旅ゝ衣裳食領ひ野兵伴當を従へく諸川のくゐ急ぐ程ゐ長ぞ日るれば然ぞるゐ時ハ移らぐ去向の村ゐ午の貝吹く時候るけゐ話分両頭然ぞ又小山朝重ハ途ゆく未得ゐ相別れく結城の城ゐ入ぞ来ゐ隨即主君成朝ゐヨ犬佛の奇異犬士の武勇、大照文代四郎們ゐ答禀ゐ事の趣及経稜素頼徳用堅削們僧俗十數名の罪人を

受合ゐく牽ぞて帰城の終ぞ詳ゐ説えゐじゝ成朝主又ゐ驚ぞて、大の道徳犬士の智勇を賞感特ゐ浅ゝ往古より霊佛の利益とゐのヨヌれも然ぞ正ぞ霊異ハるゝて我も結縁の為られば、その念佛の行者、大と八個の勇士ゐ対面ゐく意衷を示ぞべゐ悔かるぞとち不娯て今ゐ捨くぞ思ひゐ是ゐより経稜素頼們の非義非法の罪を糾しく賞罰ハ公るゝぞもゐば必や隣国の諸侯の為ゐ悔られんとく吏ゐ朝重ゐ課く件の罪人們を堅系く獄舎ゐ較系せて拷問數回ゐ及びゝば経稜素頼徳用堅削們ハ今番の奸詐暴虐を具ゐ招ゐ為るのゝゝゝ年来驕恣ゆく上を憚らぞ下を虐げるるまでも這時都て發覚れけゐ為れども経稜素頼們の親ゐ嘉吉ゐ忠死の舊功ゐ又徳用ハ當家再興の折京都の管領家へ提撕ゐいもれば倶ゐ死罪一等を宥めく経稜素頼ハ所親ゐ預け置れ徳用堅削並ゐ同悪の僧俗ハ或ハ法衣を剥捉られ或ハ背を鞭ぞく倶ゐ追放せゝるけるゐの日逸足寺の先住未得を

召よせて徳用ゐ侍らの罪あれば追放せらるゝと言示され後住いその器ふ當るべ学
徒の光実るゝと擇ゝ入院せむべゝと命せるこの諭断の一條ハ朝重憲裁として有司
と俱ふ主君の旨と伺ひく像のごゝよゐ行ひけゝ亦程ふ経稜素頼ハ絶ふ獄舍の呵責況
饒され所親の家ふ閉籠られて放免の日を待けるふその六月の時候迄ゆりけ魂病ふ犯
されく俱ふ黄泉の客とるゝけゝ亦るふ経稜素頼及惴利ハ各髪歳る男子ありそ
母親ふ携られて外祖の家ふ艱るゝ一ゆゝ三稔許歴ゝ後ふ成朝則件の経稜
素頼惴利ゝ兒子三名と召出し親の本領の半分と賜りて堅名長城根生野の絶さ
る家と嗣しめゆひ成朝かくの如く公平ゆく賞罰訓正ゝけれゝ諸臣畏服ゝ乱臣賊
子るく忠臣賢才ハ用ひられて這家長く治りゝ天正の年間晴朝の世ふ至るまで舊家
連緜の大諸侯ゝりゝ世の人の知る所ゝ間話休題却説逆正寺の未得ハ徳
用堅削ゝ追放せゝ是ゝ其の年使僧を京師ふ遣ゝて故の徒弟ゝりける那僧正影西ふ

徳用堅削ゝハ犯せる殺伐の罪ふよゝ追放せられゝと告知ゝく我寺荒て諸檀離
れんとも御坊始を忘れぎゝく鳴雁北ふ歸ゝの意あゝ山で僧綱の顕職を惜まゝ
えやく我寺ふ来て法燈と紹だゆゝ一華の亟るゝえゝを待ゝと早天の雨の如ゝとぞゝらせ
ける影西ふの消息とゝゝく感涙の拭むと覚ぞ倘今顕職の勢利を捨て師の招きふ
應ぜぎゝ這世ハ牛車の栄ゝりゝも来世ハ必地獄ふ墮ゝ呂速ふ帰ゝべゝと先ゝの使僧を
結城へ還ゝく某の院の法親王ふ陳情の啓とゝそまゝく且病着ふ托着て連りふ
職事と辭ひ亭ゝ山ゝ法の竹園直けれゝその孝順を感ゝ思召ゝく願ひのまゝく下總へ
還るとを允ゝゆひゝゝの年の冬の時候影西ハ結城る逆正寺ふかへゝ来ゝ師父未
得ふ對面せゝゝ迭ふ再會の歎び大ゝるゝ躰て困守ふ守ゝえゝ影西逆正寺ふ住
持ふ做ゝゝゝ遠近の良賤渇仰ゝ敏ゝ冒隣国ふ類るゝけゝふ又那十體の石地藏
と又那路傍小堂る地藏菩薩の利益霊異を傳ゝく者参詣日毎ふ間断る

く両所の賽銭々々ふ其をのく料らひるところ皆逸足寺へ収納まるれば財用
餘りあるのみ〻影西い倹素ふして衆徒を教育の暇ある毎ふ徒弟四五名とゐ〻〻みゑ
〻錫を突鳴らし〻城下の町近郊の邨里と券縁まけるふ大刹の住持みづから出て衆
生ふ薦る托鉢ふれい賢も不肖も皆その信をそその捨の寡少を恥じとせり有徳り程ふ先
住未得い遷化まそ三周の忌ふ丁る年までふ逸足寺ふ聚合たり金を慮二三萬両ふ
るる影西い豫より那六道山能化院を再興の志願あり開ぐ為ふ貯こふ財用をこそ他
事ふ使ふぞ〻と囲守ふ懇〻免許を経て土木の工を興まるべ成朝主欽びて則數千
金を捨〻その経営と幇助のあり且能化院の坊料を舊の如く寄附せる然ば結
城武井諸川の士農工商招ざるふ聚ひまく〻土と運び木石の車と推を者日毎ふ幾百
名るると知ぞ約莫三稔許ふ〻七堂伽藍送もく奇麗壮観目を驚ぞゆぐゆ
都〻落成まるけるあとより影西長老い那勝軍地藏菩薩を逸足寺の宝藏ろ

ぞ〻たてまろ〻ど〻のくげみん〻ぐう〻まるこまもまる
ぞ〻ーなまりて昔の如く能化院の本堂ふ居なり又その本堂の西のくふ地藏堂と造営
まそ那十體の石地藏をも逸足寺より件の堂ふ移ーまゐ〻せ又那左右川の邊多呼偈
小堂と〻と廣ぞふ造更めてその四下るる荘客の田圃を價宜く購合りて香華料と
まそ守堂の老僧を置ぞけり況又能化院ふ学寮と建て衆徒を教育ーまるる恩ふ德用ふ
追遣られる良善正直の法師们を召選〻て諸役僧ふ做けれ囲守成朝主その大功を
称言て影西前權僧正と能化院中奥の祖と仰ぐくるる〻逸足寺の住持をも兼帯ぞ
ぞと命せ〻ふ原是逸足寺い能化院教主寺の屬院るりーふ本山荒廃より以来その
子院屬院ふヨヨく逸足寺ふ屬従ひ〻と今番又改めて都て能化院ふ隷られけり影西
既ふ功成りーるば法務の暇安房へ赴くく里見殿ふ見参まゐり且〻大庵主八犬士も對
面せまくほーとそ囲守の上日と伺ふ成朝主欽びく我も亦ふ折をりく舊交を復結ん
とて躯て小山朝重と影西長老と使として種々の土宜と齎〻て安房へ遣〻ぬけり徒而影

西長老い朝重と共侶ふヨヲく伴當とゐて稲村の城ふ来着ゝ。尖士ふ就て義成主ふ見
参ー、大照文代四郎ふも對面して両國守の舊交新約障りなく敷ふ程ふ義成主ハ
影西の孝順ゑの父淨西の孤忠ふよりて先大父義烈院の白骨改葬の欵じと叮寧ふ宣と。
日毎の御食饌大々ゑ影西い逗留の間出家ゑれば許されて大山寺の不動洲崎の品山崛
那古富山の両觀音伏姫の靈迹義烈院殿基の廟墓へも參詣の本意を遂て罷
去んとゑる前日ふ義成主い影西朝重ふ東西を賜ふと勘ゝ更ふ亦、大法師と矢江親
兵衛蜑崎照文を答礼の使として國産と云所の地藏菩薩へ寄進の東西をさヘヨく
夫役们ふ舁せ從いて影西朝重と倶ふ結城へ遣して両國和順拵言約の礼ふ答ゑふ成
朝主いゑ歎びて、大親兵衛照文ふ鄉食応山河の珍味を盡ゝ且ヨく牽出物を賜ふて
安房へ還されける是よりて後里見結城の両家長く脣齒の國と称て相犯さゝるゑりけり這
折親兵衛い、大照文と倶ふ那路傍堂ゑる石地藏菩薩主の鎧塚淨西法師の墳

墓ふ詣けるかへさふ又能化院ふ立よりて十體の石地藏菩薩を拜さなり又本堂ゑる勝軍地
藏菩薩ふ燒香の折這本尊をはらくと見なるふ曩ふ諸川の那方ゑ、大法師と代四
郎照文主僕の急難と忠告ける那法師の面影ふよく肖されば訝りゑるゑよく相ふふ
件の法師い額の直中より聊左ふよりて大ゑる黒子ありを記憶ふ這本尊の地藏菩薩
の額の中央ふゆて此一尤へりくれば原来那折の忠告法師い這本尊の化現ゑりけりと肇て
悟て且感心のあまりとりと照文ふ悄語けば照文も亦心ふ死て咱们も曩ふ代香使ゑり折、大
庵へ尋ゆ〜ふ案内を乞ける那法師の相貌もゑの本ゑふ似ゑりけり甲も乙も這御佛の化現の
利益ゑりけりと今い十あまりの年を歴て肇て倶ふ悟り死とゑ、大もうち听て人の發明遲速
あれども佛の利益い始よりゑ違ざりーと感ドけり恁而、大親兵衛照文い倶ふ客殿ふ請待せ
られて先知客の役僧ふ里見殿の故らふ三ケ所十二箇の地藏菩薩へ寄進ゑふ元固の銀の
大香爐と幾唐樞ふ藏めゑる一切經を遞與ふければ住持影西出て對面して茶と看め果

子と薦め。然而里見殿の寄進の大々たる〻奴欤と舒るどして一切経い年来欲しく思ひ侍りしかども。僻る田舎迄輒く沿くさければ果さざりしに今番賜りしに宋板あれど実に千金の至宝と昔年庵主の逸足寺へ遣しぬ。立種十数軸の経と共に今より宝蔵へ秘置て永く法孫に伝へいむとて。怡悦の眉を開れる。爾後、大と法向あり又齋を薦めらるる程に日景既に傾かれば、大親兵衛照文に能化院を立去りて。伴当夫役を従へ〻一宿して次の日に又関宿より舩に乗て又その次の日に稲村の城へかゝる。倶に義成主に見参して返命と亨けり。その比義成主は照文を召よせて結城の光景を問ふとあり。照文は那能化院の本尊なる勝軍地蔵菩薩の昔ありけり利益霊異を今番親兵衛と倶に肇て悟りしとの出てその故に箇様〻と具裏に親兵衛に、大の急難と告知せり。法師のなと照文に、大庵と案内あり法師の身を解示しまるせて前後約束の違ざりける。霊佛奇妙の応験と言ひ管稱賛まるりしに義成主点頭て開いと奇しかるべき約莫霊

佛の利益と言ふ者。和漢に例尠からねど。木石十二體の地蔵菩薩倶に化現の霊異あり。前未聞の利益。あれども是を地蔵の化現と思ひ惑ひの醒ざるべ何とされば石と刻む木と作りし佛像のよくも脚を挙て言ふべき道理なし。その石佛木佛の為ぬ事を做せるは壁言ば那傀儡師のよく木偶を儛ふ像く并に使ふ神物の別に必あるべし別に神物あるとは佛像に霊異あるべ。然でも佛の利益と否と愚俗と善道に道ふる由なし。少しとも石像木像の地蔵菩薩。未然の禍福を知りてよく動し脚を運して言ひ当るあるとは吁く者孰か實の事とせんや。故に聖人は怪力乱神を語らずとの。都て神異霊応の人に福あるとは世俗是を霊験利益と稱え文神異霊応の人に禍あるとは世俗是を妖怪と言ふ有徒れば魔佛同根迄相距ること遠からず。誰かその因て起る所を覚知んや然ば神佛の霊験利益は慥に思ひ定めがたしと言ふその真福の我に及べるとなる仰ぐと雖者の用意と必ずしも真異あり我姉君の霊験を唱々まく亨ける者あり。我姉君の意とは。慥に思ひ沿ざれども真福あるべ欤のと最叮寧に諭しぬ。照文深く感服

き。宴終るに御教諭をも。酒明の醉は醒るに昔年毛野が論をも巧れども相似られど御論はあれ
精細をも解しるべし。なほ易らず因て思惟れば中庸は國家將は身らんとすれば禎祥あり。國家
將は亡んとすれば妖孽あり。とはいへども則魔佛同根也。霊驗利益と妖怪変化と禍福の同じかぎ
るは只その人にあるのみと曉得るも皆是御高論の御賜ふ所と只管に稱を退の出るまでいと後の詩を
れども淨西影西父子忠孝は小説の局を結んで文を次るなかの如し。看官前後を相照らして是より下れ
廢院の果の段は復た見るべし。間話休題。再説八犬士、大代四郎照文主僕は當日朝重と未得を
目送りて躯て荒院を立出つ。諸川の驛を過る程既に亭午なれども大家晝餉をとらんと欲するに
驛稍盡処なる飯店に席を揭げて酒と飯とを賣るあれば卒とこれを俱に立寄るに這店と奇麗なる奥ゆも
坐席あり。大八犬士照文代四郎は俱に奥まりなる孤屏の蔭に坐をとりて蔬菜の饌を誂て點兵伴
當一樣に各昼飯を果しけり。畢竟八犬士は這里に憩ひて後の話説甚麼なる開分なるを聽れかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十終